

はじめに

検証用データの必要性、重要性は言うまでもない。単に、集計的交通流動量について、シミュレーション結果における再現性を検証するだけでなく、使える指標と使えない指標を明らかにし、モデルの性格付けを行う。モデルを利用するものに、その使い勝手、使う場面、アウトプットの読み方、等を示し、交通影響等を評価する指標を作る場合の留意事項等が明らかにされる。

このような性格を持たせたい検証用データの課題を整理してみる。

検証用データの特性と課題

検証用データは実態調査によって得られているが、すべての交通流動現象（評価指標）を捉えているわけではないし、調査精度の問題もある。このことは、さして問題とはならないだろう。調査精度は、何らかの方法で検証しておけばよいし、捉えられている内容（評価できる指標）を明示しておけばよい。

このデータは、その時点の各種条件下での出現交通流動である。データセットには少なくともこうした特殊条件は付加しておく必要があるだろう。例えば、交通流動を大きく左右するものとして、次のようなものがある。

- ・交差点、歩道のない道路での歩行者
- ・駐停車車両
- ・バス、低速車両、自転車、バイク等の混入

実際に検証するモデルにおいて、これらの条件がどこまで反映、再現できるか、あるいは、特殊条件下でない場合のデータセットをどう作成するか（影響をどう取り除くか）ということが大きな課題となる。これらの条件のうち重要と思われるものは、データセットとして付加しておくが、使い方は、検証するモデルの性格、内容によって、使用者の判断に委ねるというのも一つの方向であろう。

モデルの活用場面を考えた検証データ

検証のための評価データの一つとして経路情報がある。経路情報が検証には極めて重要であると言うことではなく、モデルの活用場面で、経路情報がどういうふうに扱われるか、そのための検証データとしてどうあるかということである。

モデルの活用場面として、地区全体の交通需給バランスや、渋滞状況等をチェックするような場合は、特に経路を問題にする必要はない場合が多い。モデルが、施設整備効果や影響評価を行い、評価指標を作成したり、そのための交通施策の策定に活用される場面では、交通の流れ方、交通経路情報がアウトプットとして要求され、経路の再現性が要求される。

特に、地区交通に関連する計画評価策定の場合、対象とする道路は、区画道路から幹線道路まで含み、対象とする交通も、地区内交通から広域交通まで含む。これらの交通挙動、特に経路に関する挙動は大きく異なる。また、計画や施策においても、それぞれの行動に対応して考えるべきものとなる。広域交通と地区交通との区別、それぞれの経路選択情報が極めて有用な情報となる。

検証用データセットにおいても、モデルの活用場面を考えて、経路情報とともに広域と地区といった交通の性格の情報も必要である。例えば、吉祥寺のデータセットにおいて、幹線道路においては、対象エリア外でもナンバープレート調査をおこない、広域交通と地区内交通との区別をしておく（たぶん、経路選択パターンは大きく異なっているであろう）。

おわりに

複雑な要因のもと、出現する交通流動を完全にシミュレートすることは極めて困難である。活用場面に最もヒットする内容であるかどうかである。検証データもそれに対応すべきである。ここでは、その一側面について述べさせていただきました。